

神戸の水

「神戸の水は、世界で一番おいしいうて、知ってる？」

坂道をのぼりながら、先生がみんなに聞きました。

「えっ！」

「ほんまに？」

みんなは、おどろいたようにざわめきました。

それは、年に一度の全校写真会の日でした。わたしたちは、新神戸駅の近くにある布引のたきに向かっていた。リュックサックをせ負い、二列になつて歩いていました。

「神戸の水はね、食品の国さいコンテストで金賞をとったことがあるのよ。『神戸ウォーター』っていう名前ですごくの人に親しまれているの。」

先生が、少し息を切らしながら話しています。

「神戸には港があるでしょ。そこへやってくる世界中の船乗りさんたちが神戸にやって来ると、この水はおいしいと言って船に持ちこむんですって。赤道をこえるくらいに遠くまで行っても、おいしく飲めるそうよ。船乗りさんたちはみんな、神戸にあこがれていたのね。」

「そんなにすごいんや、神戸の水って。」

神戸の水が有名なことを初めて知ったわたしは、うれしくなつて、坂道をのぼるつらさをわすれていました。

「六甲山にはたくさんのおきがあるのよ。わき水もたくさん出ていて、わたしたちが家で使う水にも使われているの。」

ふだん、自分が使う水のことなんか考えたことがなかつたわたしは、おどろきました。

「へえ、六甲山の水を飲んでたんや。」

坂道をのぼり続けていくと、水しぶきを上げて流れ落ちる水が目に入りました。

「わあ、きれいなあ。」

「すごいな。」

立ち止まつて、そのおきを見上げました。

「ここが、めんだきです。高さは二十メートルくらいね。でもこれでおどろいちゃいけないわよ。」

先生はそう言つて、また坂をのぼり出しました。わたしたちもめんだきを横に見ながら、坂をのぼっていきます。と中に、小さなおきが二つありました。どちらもきれいな水が流れ落ちていきます。

さらにのぼっていくと、ゴーという大きな音が聞こえてきました。

「さあ、これがおんだき。このおきが布引のおきとよばれています。高さはめんだきの倍の四十メートルよ。」

先生はたきの上の方を見上げながら、説明してくれました。

「わあ、すごい。そしてきれいな水！」

わたしは、思わず声に出して言いました。すると、先生が、

「そうね、大きいし、水がとってもきれいな。だって、神戸の水は世界一だものね。」
と言って、わたしに笑いかけました。

わたしは、町の近くにこんな美しいたきがあるとは知りませんでした。

「よし、このたきにしよう。」

わたしは布引のたきをかくことにしました。

たきを見上げては筆をとり、画用紙にかけてはまた、たきを見上げます。何度もくり返しているうちに、すっかり布引のたきの風景がわたしの頭の中に入ってしまったようです。

水が流れる様子を表げんするには苦労しましたが、きれいな水だとわかるようにかきました。水しぶきが上がるころも、うまく仕上がり、満足のいく絵が完成しました。

「あと十分で集合よ！みんな、そろそろかたづけ始めて。」

先生の声が聞こえました。

周りはいっせいにあとかたづけを始めました。筆をあらって絵の具をしまわなければなりません。筆の絵の具をあらった水は、いろいろな色がまざって、ひどくにごっています。

この水は、ペットボトルに入れて持ち帰り、学校にもどってからする約束になっていました。よごれた水を入れたペットボトルは、ずっしりと重く感じます。

「こんな重たいもん、学校まで持って帰るの……。」

あの道のりを考えるとうんざりしました。

「どうせするだけやのに。」

ペットボトルをリュックサックに入れようとするわたしの手が止まっていました。

そのときです。

「さすが、うまいなあ。」

ふいの声におどろいてふり返ると、としゆきさんがわたしのかけた絵を見ていました。

「水がごっついきれいやんか。」

としゆきさんはそう言うと、集合場所へ走っていききました。

わたしは、はっとしました。

「そっや、そっやった。」

わたしは、ペットボトルをしまい、リュックサックをせ負いました。来るときよりも重くて、かたにずっしりと感じます。

帰りは、のぼってきた坂道を下ります。けい流の音がすがしくひびき、きれいな水は、太陽の光を受けて、いつそまぶしくきらきらとかがやいて見えました。

わたしは歩きながら、自分のかけた絵をもう一度見ました。きれいな水がうまくかけています。世中の荷物は重いのに、足取りはなんだか軽くなっているように感じました。